

大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会
教養教育・共通教育検討分科会(第14回)

日本の展望委員会

知の創造分科会(第12回)議事要旨

- 1 日 時 平成22年2月10日(水) 10:00～12:00
- 2 会 場 日本学術会議 5階 5-A(1)会議室
- 3 出席者 藤田委員長、小林(傳)副委員長、増淵幹事、荻部委員、河合委員、
小林(信)委員、三田委員、塩川委員、長谷川委員、松本委員、
吉見委員

(大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会)
北原委員長

事務局 廣田参事官

4 議 事

(1) 知の創造分科会報告書案について

廣田参事官より、資料1、資料2-1、資料2-2、資料3、資料4及び北原委員長配付資料について紹介があった。

- 配付資料は、30年前に静岡大学の教養部にいたときに書いたものである。今から思うと、質保証の課題を意識していたのかもしれない。一つ言いたかったのは、違った人と仕事をすることは非常にいいことだ、ということである。また、科学者は何をしなければいけないかというと、学問の出発点は事実直面したときの単純な驚きであり、専門的な因果関係等は高度の技術による実験と推理で解明し、最後に非専門的なアマチュアとしての自分というところに帰る、ということである。

藤田) 資料1、日本の展望委員会の報告書案について。赤字になっているところは、今回新たに書き加えた部分や大幅に変更した部分である。それ以外の黒字の部分でも赤字になっている箇所は、以前から見てもらっている部分ではあるが、文章や表現をかなり調整している。また、この報告書案は展望委員会の査読委員2名に査読してもらうことになっており、先だって詳細な査

読意見をもらったので、それを踏まえて訂正した箇所もかなりある。

まず、一人の査読委員の先生からは、「全体的に文章が長すぎるので、1文あたり長くても5行、できれば2～3行にして欲しい」との指摘と修正案をいただいた。その修正案にしたがって、短く切ることができる文章はなるべく2～3行で終わるようにして、読みやすくした。また、もう一人の査読委員の先生からは、中身の構成については基本的によく練られていて自分としては非常に良いと思うが、学問的な論文調になっているので、一般の読者向けにもっとわかりやすい文章にすべき、ということだった。分量オーバーについても指摘された。さらに、「グローバルという言葉が頻繁に出てくる」

「いわゆる生態系の破壊の問題や、理系が現在直面している問題（遺伝子組換え等）にもできればもう少し言及してもらいたい」という指摘もあった。そこで、それらの点についても可能な限り補正したが、内容や趣旨は前回検討してもらったものと基本的には変わっていないと思う。最後の方の赤字部分を含め、書いてあることの骨子はほとんど最初の要旨、特に提言のところに書いてある。まずそれをご確認いただき、その後、内容的な検討をしてもらいたい。それから、後半の本文の赤字部分と、それ以外のところも検討してもらえればと思う。

特にご検討いただきたい点としては、①最初の方で用いている「知性・智恵・実践的能力」という概念や、「学問知・技巧知・実践知」という概念、用語の使い方に問題はないか、という点。また、②3つの公共性と市民的教養（市民的教養の方は質保証の方でも使っている）についても、概念的に問題ないか、ということを検討していただきたい。

語学の部分は、塩川先生が非常に丁寧な文章を作ってくれたので、それを使わせてもらった。また、学士課程の専門教育については前々から小林（傳）副委員長が言っている3つの要件をそのまま入れている。提言のところには入っていないが、本文には長谷川先生の報告で指摘されていた、戦前は教養3年・専門3年だったにもかかわらず、戦後は教養2年・専門2年になっている、ということを現代の大学が抱えている制約条件として指摘している。その他の部分も基本的にはこの分科会で先生方に出してもらった議論を書き込んだつもりである。部活動、サークル活動等についても、このような書き方でいいのかどうかご確認いただきたい。また、以前は本文中に特定の研究者の名前を書いていたが、すべて注に落とした。こういったところが特に気になっている点である。それと「メディアの地殻変動」や「知の地殻変動」についても、使い方に問題がないか、ということも確認してほしい。さらに、先ほど査読意見として紹介した「生態系の破壊の問題」などについても、適切な内容・表現をご提案いただきたい。

- 25 ページに、体育健康教育について少し書いてある。教養の中には言語的

伝達と非言語的伝達があると思うが、体育を教養教育にどう位置付けるか。感性が必要ということで、芸術とも関わってくると思う。これら体育・芸術の位置付けが今まで無視されている。そこを何か上手く書くことはできないか。

藤田) その点についてはどのように書こうか、と迷ったところである。言語のことをこれだけ特別に書いて、体育について書かないのはバランスを欠くと思った。しかし、どのように書くのが適切か迷い、こういう言い方になっている。

- 言語・文学委員会でこのことを報告したときに、先生方から「いわゆる芸術についてのコメントがあったらいい」という意見が出ていた。
- 日本の大学には博物館はあるが、なぜシアターはないのか、という意見もある。

藤田) 体育や芸術系についても適切に書き込むことができればと思う。全国大学体育連合会という団体のある先生から、特に質保証の報告書で体育がどのように扱われるのか、非常に気になっているという意見をもらっている。

- うまくしないと体育は体育会系のためものになってしまっている。
- 本気でやっているのは体育というより部活ではないか。体育は健康のために参加している、というのが現実である。
- 11 ページに自然科学の話が書いてある。第2パラグラフ目では『その一方で、二酸化炭素排出量の増大、地球温暖化、オゾン層の破壊、放射性廃棄物の増大などによる地球環境・生態系の破壊という危機を引き起こすことにもなった』となっている。二酸化炭素排出量増大と地球温暖化は一応因果関係で結ばれている、と言われている。したがって、もしここに並べるのであれば、二酸化炭素排出量増大を削除し、地球温暖化だけにして、今年のCOPが生物多様性の話なので、生物多様性の減少を入れた方がいいのではないか。
- 私もそれについて言おうと思ったが、そこはこれからかなり重要なポイントになると思う。生物多様性の危機、という表現でどうか。
- そのようにしたいと思う。

- また、3行下の先進国と発展途上国の対立という話について。現在は先進国と発展途上国という二項ではなく、三項関係、三つ巴になっている。したがって、中国やインド等を入れておかないといけないと思う。さらに、ライフサイエンス、生命科学技術という言葉は入れた方がいい。遺伝子組み換えだけでは十分ではないと思う。
- 臓器移植の話題等もあるので、もっと色々なことに気をつけないといけないと思う。

藤田) それらのことをどのように入れたらいいか、後で教えて欲しい。

- また、非婚化・晩婚化・少子化という話があるが、年齢構成の激しいひずみということもあると思う。海外から移民を受け入れざるを得ない事態がどの国でも起こりうる。
- 書き出すと際限がなくなってしまう。

藤田) 確かに、あれもこれも書かないといけない、といったことになりかねない。学術会議が発出する「提言」であるから、主要なジャンルや課題への目配り・配慮も必要だが、あれこれ羅列するのも適切ではないので、趣旨と要点を明確にする方針で絞り込みたい。

- 7ページのサークル活動について。4～5年前に学生部長をやっていた際に、大学にいる間にそういう経験をさせ、学生のガバナンスをきちんと育てることが必要であると感じた。

藤田) 今回倫理をかなり入れたが問題ないか。

- 倫理は難しい。倫理教育をすれば倫理が身に付くのか。色々な倫理の学説を学んでどんどん相対主義になっていく、ということもある。

藤田) 倫理教育という言葉は使っていない。ただ倫理という用語を使うのがいいのかが難しい。

- しかしここでは書かざるを得ない状況である。
- 要旨のキーワードは知性・智恵・実践能力になっている。「智恵」という言葉はいい表現だが、割りとぼんやりしている。一般の読者に「知性」と「智

恵」の違いがわかるのか。

藤田) その通りだと思う。ただ、「智恵」という言葉を入れた方がいい、という意見は、この委員会でも、日本の展望委員会でも出ていた。

- 智恵よりも、知性の方が問題なのではないか。知性は智恵を含んでいるという理解をすると重なってしまう。戦後の日本で、ジェネラルエデュケーションを持ち込んだアメリカ人は、知性を与えずに知識を注入していた。そういうときの知性は智恵を含んでいる。そういう感覚を持っている人からすると、知性というのは智恵を含んで知性だ、と言いたくなる。
- そのイメージははっきりさせた方がいい。もともと智恵というのは言語的知性と非言語的知性等を含んでいる。

藤田) 色々な経験知も含むと思う。

- 倫理ということが言いにくいから、こうなっている、という面もあると思う。
- 知性や智恵を英語で言うとなんになるのか。

藤田) 知性は“intellect”“intelligence”であり、智恵は“wisdom”である。英語でも一応区別されているので大丈夫だろうと思って書いたが、知恵は悟りや賢明さが含意されていると思う。、いずれにしても知性と重なりがあるのは確かだと思う。

- 一般の人が読んだときには、繰り返しや同じものとしてとられかねない。
- 知性というところで意味したいのは命題的知識のようなものだと思う。たぶん智恵というのはそれに対する反省的知である。
- 初出のところで括弧書き等で書ければ良いと思う。
- 他の分科会の提言では、注の扱いについてはどのようにしているのか。

藤田) 最後につけるのだろうが、今は見やすくするために脚注にしている。展望委員会の判断を踏まえて、後で調整したいと思う。

- いつも話題になることだが、「科学・技術」か、「科学技術」か、つまり“science and technology”か、“science based technology”か、という点もある。ここでは両方が混じって使われているように思う。

藤田) 日本の展望委員会でも人文社会科学の委員会の報告書でも、両者を区別して使っている。もう一方で、社会学などでは特にそうかもしれないが、脱構築主義以降、知の再構築・捉え直しがなされてきた。ここではそういうサイエンスの動向も含めて、また、日本の展望委員会の使い分けも踏まえて、一応書いている。ただ、そういう説明なしに、両方の表現を用いていいのか、また、その使い分けが徹底しているか、ということはある。ただ、この提言では“science based technology”で読んでもらってもかまわない場合が多い。しかし、“science and technology”の意味で読んでもらう方が適切な場合もあるので、今日の議論を踏まえて、再度読み直して調整したいと思う。

メディアの地殻変動について。知の地殻変動も加えたが問題ないか。

- 表裏の関係なので問題ないと思う。

藤田) もう一つ。「市民的公共性」「社会的公共性」「本源的公共性」の区別はこれでよいか。

- 少々とっつきにくい印象がある。

藤田) 「公共性」という概念は使っても、あえて「市民的公共性」、「社会的公共性」などを書かなくてもいいかもしれない。ただ、3つの公共性のレベルがあると考えると、それを示すコンセプトがあった方がいいと思った。

- 「社会的公共性」はある種学びと実践の公共性である。「本源的公共性」というのは生命の公共性、生存、生きることの公共性である。説明がややわかりにくいかも知れない。言い方がやや難しいかもしれない。
- 「市民的公共性」と「社会的公共性」はある意味近いと思う。しいて言えば「市民的公共性」といった場合、社会の意思決定に参加するという意味合いで、「社会的公共性」にはそれに加えて連帯等の意味が入っていると思う。

藤田) 「社会的公共性」は社会の様々な問題を、公共の問題として捉え、解決していくというレベル。市民的公共性は意思決定のレベルであるのに対して、その意思決定の対象として社会的公共性がある、という意味で区別した。

- 三層構造だと思う。本来の生存権がなければ社会はあり得ないし、社会がなければ意思決定はあり得ない。
- ここでの文脈でいうと、大学の教養教育に一番関わるのは真ん中の「社会的公共性」である。もう少し、生存権のところの公共性があるが、そこまで大学が背負うのか、というと、背負えない。社会の根本に関わる話である。ここでいう市民的公共性というのはやはりもう少し政治の問題である。ただ、2番目の社会的公共性というのは、教養教育が関わってくる。

藤田) 「本源的公共性」の方は、個人の尊厳や自律性等を尊重するということを社会生活や制度設計・社会政策の基本的前提にするという趣旨である。後のところではそういう「本源的公共性」ということを含めて理解することが重要だ、としか書いていない。そういう側面を前提にするということ、あるいはそういうことの重要性を理解するということが重要である。

- 第1のレベルは、選挙に行く、パブリックコメントを出す、という以外にデモをする、というところまで含むようなものである。

藤田) そういうものは全部含むと思う。

- 政治的なプロセスにどういうふうに関わるか、ということである。第2レベルとの間の関係は、非常に相互に浸透するものである。

藤田) したがって、2番目のレベルがなければ、他のレベルもない。

- これは大学の課題というより、日本社会の課題であり、それに対して大学はどういうふうな教育を与えるか、という問題である。

藤田) そうということである。したがって、学生がこういうことを学ぶ機会を何らかの形で作ることが大事である。

- メディアの地殻変動について。非常にコンパクトに書いてあっていいと思う。しかし、キーワードとして、インターネットや双方向の通信がかなりできるようになってきたとか、オンデマンドで映像をみることができるようになった等のことが書かれているが、現実にはツールとして革命的な技術ができてきている。ほとんどの人は辞書は使わずに、インターネットでコミュニケーションできてしまっている。授業等もこれからは教室に行かないで家で受ける。こういうことが起こりつつあるので、ちょっと記述が弱いのではないか

と思う。

藤田) 要旨に書いていなが、本文には書いている。

- ただ、少し短すぎると思う。教室に行ってわざわざ先生の顔を見なくても、マシンで教養教育ができるようになってきている。授業の映像もストリーミングでどんどん流せるようになってきている。
- 本当にそうなるのだろうか。
- 私はそうなると思う。
- しかし、IT技術ができたときには「これからはこうなる」というようなことが色々と言われたが、普及してみると逆に代替できないものの価値が相対的に上がる、ということが起こっている。
- しかし、学生が本を読まなくなったのはインターネットの影響がとても大きいと思う。インターネットでも普通に情報がとれてしまうし、幅広く検索していけばいくほど情報がとれてしまう。
- 基本的な問題は、情報技術の発達により知識が無限化してしまった、ある種知識の量が爆発してしまった、ということである。また、ある種ユビキタス化して、どこでもいつでも情報がとれるようになってしまったがゆえに、ある優良な知識が構造化されているということの価値がわからなくなってしまった。無限になるというのは必ずしもいいことではない。ある有限の中で自然と知識と知識が構造化されていく、ということが本来の知識の在り方である。どこにいるのかもわからずに全ての果実を得られてしまう。生活に不満もなく、おいしいものも食べられるし、非常に頭が良くなったような気がしてしまう。そのことは教養教育そのものにとっても危機である。知識はもっと有限なものであり、極めて体系的に構造化されていて、それゆえに便利ではない。知識を学ぶということは便利であっていいはずがない。例えるなら果実を得るために苦労して藪の中に分け入り、実は横には崖があるかもしれない、ということが知覚できることが教養である。ボタンを押せば果実が得られるようなものではない。だから、「ユビキタス化で便利になったということは、教養教育そのものにとって全くいいことではなく、むしろ危機的な状況である」という書き方ではどうか。

藤田) 参考文献については、事務局の方で、先生方の発表等で引用されているも

のをまとめてもらった。このほかにぜひ入れた方がいい、というものがあればご連絡頂きたい。また、脚注でも文献を引用しているが、こういう議論ならばこの先生のこの本も、というのがあればぜひお知らせ頂きたい。

- 「市民社会の課題と市民性の育成」について。タイトルには「市民性」とあるが、中にはそうではない言葉が入っている。中に書いてあることはそういうことだろう、という想像はつくが、少しわかりにくい。

藤田) その点については気づかなかった。

- 市民社会を語るときと市民を語るときはこういう区分になる。恒産と教養のある他の市民ではないような市民、というのは一体誰のことなのか、というのは難しい。
- 今はだいたいこういう意味で使っていると思えばいいと思う。最後の『その担い手となりうる市民』というのをもう少し強調して書けば、それで済むのではないか。
- 国民や住民とは何が違うのか？
- 国民と違うのは、国籍を限らないということである。戦前の行政法学では、住民と臣民と公民にわけていた。つまり単に住んでいる人と、国籍を持っている人と、選挙権を持っている人にわけていた。
- 政治的文脈でそういう区分をしたときに、ヨーロッパでいうシティズンシップと市民運動というときの市民と教養市民とは全然性格が違う。ここで言う市民は、市民運動をしている市民を指すのか。
- 市民運動に限定はしていない。公共活動に参加する主体ということだと思う。市民運動というときも本来はそうだと思う。
- 市民には資格はいらない。なんとなくわかったようになっているが、市民という言葉定義しようとすると難しい。
- トートロジーになってしまう。公共活動をする人が市民のではなく、そういう活動をしている状態が市民である。
- だから今資格といったのはそういうニュアンスで、そういう活動をしてい

るとか、そういうことに対するパワーを持っているということではない。

- もう一つややこしい問題として、マックス・ウェーバーは『ヨーロッパには市民がいたのが特徴だ』と言った。ヨーロッパの人から言わせると日本には市民はいないということになる。その問題があるので非常に難しい。
- ウェーバーが言っているのはブルジョワよりもう 1 つ前のローマの市民である。
- 樋口洋一先生等が「市民」という場合、市民権を持つことが国籍と同じことで、それはもしかしたら法学政治学の分野の考え方ではないか。
- 国籍を有するか、は微妙な問題になるが、樋口先生が言っているのは公共領域に積極的に関わっている主体としての市民である。
- その場合、市民権という権利からは排除される人がいるのではないか。
- それは微妙である。
- 排除される人について、市民と言えるのか言えないのか、という問題が出てくると思う。
- どの範囲を含めるかという問題になってくると思う。
- 現在、市民参加、と言っている時は排除するものではない。
- それは日本国籍を持っていなくても、日本の政治に参加することができるし、それが望ましい、ということか。
- 市民性は citizenship であり、国籍を含んでしまうので、本当のところはそこが問題になるのだろうが、ここでそれを問題にすることはやめておいた方がいいと思う。
- 「平和的な解決」とあるが、今の学生にとって「平和的」とは何かというと、何も言わないことである。したがって、「平和的・合理的」とした方がいい。「平和的」という言葉を全面に出すと学生は本当に引いてしまう。
- 事を荒立てないですまそう、ということだと思う。

- 昔の「平和」とは全然違う意味になっている。
- 「平和」を「講和」という意味で使うというのがわからない。「講和」というのは、戦争状態のときに、講和条約で紛争を停止する、というものである。つまり平和の前提には戦いがある。戦いのないところに状態で平和というのはいかがなものか。歴史的に見ても平和というのは全て講和である。逆に言うとヨーロッパの思想史の中では平和と正義はしばしば対立する概念である。なぜなら正義を完遂するためには戦わなければならないからである。
- 「平和的」ではなく、「合理的」ではだめか。

藤田) これについては、なくてもいいのではないかとも思い、迷っていた。

- ある意味で「建設的」である。

藤田) 暴力的、強権的、威圧的に解決するやり方もありうるから、そういう力によるのではなく、という趣旨で入れた。

- なくしてしまうのが楽ではある。
- 曖昧な領域を残しながら、という方がいいと思う。「持続的」「安定的」等、長期スパンで共生していこうということだと思う。
- 「公正な」という表現もあるのではないか。

藤田) 「平和的」を残すかどうか、「合理的」を入れるかどうかも含めて、少し検討したい。

後でお読み頂き、他にも気付いた点があれば、メールなどでご意見をいただければと思う。

(2) 教養分科会報告書案について

小林(傳)) 資料2-2のような項目立てにすると、今までいただいた意見等が一応反映できると思う。唯一入っていないのは卒論である。教養教育の観点で卒論を入れる、というのはよかったのかどうか。学士課程といったときには当然議論になるが、教養教育の報告書で卒論という項目を入れるのがいいのかどうか。

- 項目にエリートを入れるかという話について。エリートという言葉はよくないが、二段構成はいいと思う。私はリーダーという言葉を使っている。リーダーだから他の分野の人がついてくる。何を身に付けるべきか、という話とある意味つながりがある。例えば、「黙秘権は大切か」「人権擁護はいらないか」というアンケートを行うと、人権に対する反発が強く、黙秘権はいらない、という人が過半数を超える。ところがそれを学歴別に見ると、大卒以上はきちんと、黙秘権は必要だ、としている。これは大学の存在価値ではないか。こういうことを考えていったときに、大学進学率が5割を超えてくることになると、民主主義の中で非常に価値があると言える。

小林(傳)) エリートだとなかなかファンクションとして理解しない。リーダーの方がニュートラルな感じがしてよいと思う。

- やはり教養教育は、民主主義社会を支える市民の育成というところにかかなり絞り込んでいる。先ほどの指摘のように、今その問題を考えてしまうと、グローバルな民主主義社会を支える市民の育成とは何か、という問いになると思う。それには人権の問題があったり、紛争解決の問題があったりして、全て関わってくると思う。グローバルな民主主義社会を支える市民というと、市民もグローバルでなければならないようになりかねない。しかし、グローバルな民主主義社会にも色々なローカルなことがたくさんある。グローバルな民主主義社会を支えるグローバルな知識人もいるかもしれないが、グローバルな民主主義社会を支えるローカルな住民もいる。ナショナルなレベルでの民主主義というレベルではもはやなくなって、グローバルな民主主義社会を支える21世紀の市民とは何か、というフェーズに徐々に移っているという認識の中でどういう大学教育が考えられるか。

また、リテラシーというのは若干拡大解釈をするとしても限界があるのではないか。やはり読み書き能力がベースなので、読み書き能力を拡大していても、やはりリテラシーというと基本的には読むというところにかかなり力点が置かれてしまう。しかし今起こっている新しいコミュニケーション教育では、読む人が誰もいないというか、万人が書き手になったような気になってしまう社会である。ただ、本当に書き手になれているのか、ということに

については問題がある。ブログやツイッター等を色々な情報機器を使って、とりあえず発信者になっているが、全然読めないのでもリテラシーが必要だ、ということにもなる。しかし、それを「だからリテラシーが必要だ」ということではない形で、もう少し未来志向的な形で考えることが必要である。リテラシーというと受容の形で問題を捉えることになってしまうので、少し違う概念の方がいいのではないかと、思う。

もう1つ、コミュニケーション能力ということだが、おそらくコミュニケーション能力やコミュニケーション教育という概念はもっと広いのではないかと。ある意味で教養全体のコミュニケーション能力は、社交性も情報技術ももちろんだが、知識を知識体・コンテンツとして身に付けるというよりは、教養課程における知識、本の読み方や議論の仕方、論文の書き方、体育や芸術もそうである。市民としてある種のコミュニケーション能力を身に付けること自体が教養教育だ、という部分もある。おそらくコミュニケーション能力、コミュニケーション教育という概念のレベルで言うと、これが一番大きいような気がする。

また、自分たちは何を学んでいるのかや、情報の氾濫により自分の位置が見えないので、非常に近視眼的に、狭いところに限定して自己保全を図ろうとするということがある。自分たちがいる場所や知識の有り様や社会の変化を可視化していく、ということがどこかにあると思う。

- コミュニケーション教育については、言語・文学委員会の先生で心配している方がいる。コミュニケーションという言い方をすることにより、かえって具合が悪いことが起こるのではないかと、ということである。

また、資料2の8ページの、非専門教育としての教養教育の注の中でアメリカのことが問題になっている。これはつまり思考をコミュニケーションする、ということになり、目的もなしに克服させてしまっていて振り回す、ということだと困ることが起きる。この点は問題である。もう1つ、リテラシーについてはおっしゃるとおりだと思うが、逆に今発信ばかりをしている状況で、受信能力をどう身に付けるか、ということを見ると、やはりリテラシーという問題は抜かすことはできない。読むとか聞くという能力をどこで身に付けるのか、という問題である。立ち止まらせる必要性がどこかにある。

小林(傳)) コミュニケーション能力というのは基本的には聞く能力である。ところが現代では発信する能力として使われている。英語でコミュニケーション能力というと流暢に話せるということになってしまうし、コミュニケーション教育というと、きれいなパワーポイントの作り方やプレゼンテーションのテクニックを教育することだ、と、思ってしまう。

- それは違う、ということが重要である。
- 読書ということは自分を受動的な立場に置くわけで、ある実践ということを一且せき止める、ということになるので、非常にまどろっこしいことかもしれない。しかしそういうことをどこかで教養としてやらないといけない。

小林(傳) 本を読むということは著者に引きずり回される、ということである。

- この報告書を読んで大学側がどうやって改革するか、ということを考えると、例えばピカソの絵を見せて「これを見て思ったことを書きなさい」といわれるようなものになると思う。現実には大学の先生方は教養教育をいやがるので、結局非常勤が担当になる。なぜそういうことになるのか。それは、大学の先生は専門ばかりをやってきていて、教養を教えられないからである。FISでも、「私はできない」と教授会で言う人もいる。したがって、教養教育を行える教員を育てることも大事である。今教員は専門だけで判断されて着任する。これでは将来が問題である。

小林(傳) そこはぜひ書きたいと思う。今の業績評価システムだと、そういう人材は育たない。文系も理系も博士論文を早く書いて、そのために要件を満たすペーパーの数化されてしまうと、どうしても狭いところ、書きやすいところを集めてしまう。

- 理系でも、同じ理系の他の分野のことをあまり知らない。
- FD に一つの道があるのではないかと思っている。FD といっているのは教授法をいかに教えるか、つまり発信である。そのため、教員が、自分がどこに位置づけられているかを知る機会がない。したがって、自分がどこに位置付けられているかを教員同士が共有する場を作る必要がある。

小林(傳) その通りである。専門をきちんと市民に話せるか、ということを教員同士でやる場を設ける、といったことを行う必要がある。

- それが本当のFD だと思う。

小林(傳) そういう場を時々作ると結構おもしろがって来る。ただ元々出てくる人は、元々素質のある人で、すでにそのようなことを学ぶ必要ない人が多い。

藤田) 最終的に資料4と資料2-2をつなぐ、ということか。

小林(傳))　そういうことである。

藤田)　本日の資料を見て、更に直した方がいい点があれば、メール等で連絡してほしい。

以上